

個人レポート

『蜻蛉日記』 鳴滝籠り記事の一考察

曾 和 由 記 子

一

『蜻蛉日記』中巻の四分の一を占める「鳴滝籠り」は、この日記の山場でもある。結果的に鳴滝参籠によって作者である道綱母は、自己の苦悩を直視し、あるがままの現実を受け入れることで現世的な精神の安定を得る。この作者の内面の成長は、その後の日記の描写から疑うべくもないが、疑問を抱いたのは鳴滝籠りをせざるを得なかった動機についてである。

動機について一つはつきりしていることは、出家をするためではないということである。作者は出奔の際、兼家に「前渡りせさせたまはぬ世界もやあるとて、今日なむ。」と出家をほのめかした手紙を出している。しかし、作者にとつては出家の絆である息子道綱を同伴していることや、兼家からの返事を自邸で待つてから出発していることから、これはただ兼家の反応を確かめ、彼の気を引くためであることが窺える。そのため、鳴滝籠りの動機については「事の発端は、兼家を振り切るためではなく、むしろ兼家を振り向かせるための最後の賭でもあった」というのが大方の見方である。

しかし、実際は結婚生活十五、六年目を迎え、今さら鳴滝籠りをもってしても、兼家との夫婦関係が簡単に修復できないことは、作者自

身が身をもって感じていたであろう。それは下山後、結局これまでと変わらない兼家の態度を見て、兼家への関心を断ち切ろうとしていることから窺える。ましてや、本気で出家するつもりがないことは述べたとおりである。ではなぜ、作者は鳴滝籠りを強行したのか。鳴滝籠りは作者にとつてどのような意味があったのかを考察したい。

まず、作者を鳴滝籠りにまで追い込んだ原因について述べていきたい。

二

作者を鳴滝籠りにまで追いつめた原因は、兼家の本邸である東三条殿に迎えられなかったことと、兼家の新しい妻近江の存在である。東三条殿は、超子の入内などで本邸の必要を感じた兼家が建築を始めさせ、天禄元年に完成した。良き子女を持つ時姫の本邸入りは確実であるが、兼家は当初、作者もここに迎えたいことを彼女自身に語っていたらしい。

その言葉に作者は多大な期待を抱いていた。そもそも、この東三条殿入邸までは、時姫と作者に対する北方としての兼家の扱いにはそれほど差はなかった。時姫方は子どもがたくさんいるからこそ兼家の待遇も厚いが、たとえ子どもが一人であっても、時姫に引けをとらない待遇であることに、作者の自信すら感じる。

しかし、時姫と作者の下衆の争いなどが原因で、結局作者は本邸には

迎えられなかった。それによって、「今までは時姫と対等に扱われていたのに、今後は時姫の方は本邸で正室的存在となり、幸い人となるだろうが、自分は兼家の氣の向いた時のみ通う妾的な存在に過ぎなくなり、何時捨てられるか解らない」⁽³⁾存在になったのである。何よりもこの出来事は、時姫と作者の「妻」という立場の差を世間的にも確定付けてしまった。

さらに追い打ちをかけるように、同じ頃、作者は夫兼家の新しい通い所である近江という女性の存在を認知する。

そして、天禄二年正月から兼家の素通りにあい、続けて兼家と近江の結婚が成立した。近江の存在について後藤祥子氏は次のように述べている。

近江の出現は、あたかも時姫と腹背の関係をなしているといえる。「年ごろのところ」(自分よりの以前から兼家との古い繋がり)あるいは「子あまた持たる所」という。時姫の位置づけは、それとは次元の異なる新鮮な愛情関係という面で作者の優位性を温存させてきたが、近江の出現はその最後の唯一の拠点を覆すことになる。存立の基盤を両面からつき崩され、虚飾をそぎ落とされて、作者は兼家や世の中と対峙する。⁽⁴⁾

このように、女性としての自分の基盤を崩されたことは、作者にとってはもつとも耐え難いことであると同時に、自分の立場によって、道綱の将来までもが危惧されるのである。これらが鳴滝籠りに至る原因といえる。

三

東三条殿入邸が叶わなかったことと、近江という兼家の新しい妻の出

現という事態は、自分の妻としての存在価値のなさを世間に知らしめるものである。ここから、作者が兼家に求めているものは、自分に対する愛情だけではなく、むしろ、「妻」としての確固たる社会的立場を明確にして欲しいということがいえよう。このことは、増田繁夫氏も次のように述べている。

『蜻蛉日記』を注意して読むと、この作者が兼家という夫に求めているものは、夫の自分に対する深い愛情といったものではなく、より深い層にあるのは、兼家の北方として自分を待遇し、自分の社会的地位を高めて欲しいという願いであると認められる。⁽⁵⁾

鳴滝籠りの真意もここにあるのではないか。

確かに兼家の愛を確かめることも目的の一つではあるが、それよりも「東三条邸に入らなくても、兼家に大切にされている妻」という地位を世間に認めさせることを作者は重視していたと思われる。東三条殿や近江のことで、一度失った「妻」としての地位を、鳴滝籠りという自ら世間の噂に上る行為を行うことによって、「兼家の妻」という確実な地位を世間に示す必要があった。また、鳴滝籠りは兼家の配慮ある扱いがあつてこそ、結果的に作者は「兼家の妻」という地位を確認し得るに至る。しかし自分の出奔に対して、兼家が黙って見過ごすはずがないという確信を、作者は出奔当時から抱いていたと思われる。それは、出奔の際にわざわざ兼家に文を書き、自邸で兼家の返事を確認してから出発していることから察せられる。

ここまでして彼女が「妻」という地位に固執するのは、息子道綱の将来を危惧していたからというのが一番の理由ではないだろうか。

前にも述べたように、東三条邸に入れなかったことや、兼家に近江という新しい妻ができたことは、狭い宮中ではすぐに知れ渡ったであろう。

それによって、作者が世間に軽んじられることは、同時に、宮中に出仕し始めた息子の道綱の立場も軽んじられることになる。道綱は天禄二年の鳴滝籠りの少し前、天禄元年八月に一六歳で元服している。そのため、公的な場で父親である兼家や、時姫の息子道隆などとも直接関わらなければならぬ。これから政治世界の中で独り立ちをしていく道綱にとって、やはり強い後ろ盾となるのは父親の兼家しかない。もはや正室としての立場を諦めるしかない作者にとっては、せめて次妻であっても、その立場を確実にすることで、息子の将来を守ろうとしたのではないかと考える。

四

作者が、息子の将来を案じたのは、道綱の人格の頼りなさや、母子癒着の環境が関わっているよう。『蜻蛉日記』における作者の息子の描写は、道綱の実年齢よりも非常に幼い。鳴滝籠りの記事の中でもその幼さは表されている。

まず、参籠一日目の夜、作者を迎えに来た兼家に「すべて汝いと口惜し、かばかりのことをば言ひなさぬは」と責められて「泣きにも泣く。」また、兼家に「汝は呼ばむ時に来」と、鳴滝に残されて「ししと泣く。」二日目、作者が「かたち異にても京にある人こそはと思へど、それなにいともどかしう見ゆることなれば、かくかく思ふ」と、道綱に死よりも出家の方がましだろうと語ると、途方に暮れた道綱はただ「さくりもよよに泣く」のみである。

このように、作者による息子の描写は、まだ十歳にも満たない子どものように幼い。しかし、実はこの時、道綱は十六歳であり元服もしていたのである。

この道綱に対する幼い描写は、下山をしない作者の見舞いに訪れた、時姫腹の長男道隆の描写と比べると、その差は歴然である。道隆はまず道綱を呼び出し、作者との取り次ぎをさせる。道隆の「木陰に立ちやすらふさま」を作者は「京おぼえていとをかしかめり」と記し、子どもっぽい道綱に比べて、格段な成人ぶりを感じさせる。

また、さらに注目したいのは、作者が元服後も相変わらず道綱のことを「幼き人」を呼び続けていることである。本日記において、道綱が「幼き人」と書かれている箇所を表にすると次の通りである。

年号・月	記事の内容	道綱の歳
◎上巻三例 天曆十年九月 康保元年七月 康保三年八月	時姫と贈答 母の死 ゆするつきの水	二歳 一〇歳 一二歳
◎中巻十二例 安和二年閏五月 天禄元年二三月 四五月 六月 七月 八月 天禄二年四月 六月	悲痛な遺書 旧宅に帰る 賭弓で活躍 胸を刺す車の音 唐崎の祓え 旅の歌を兼家に 相撲のころ 道綱の元服 長き精進 道綱母、出奔 兼家迎えに来る 山寺の哀愁	一五歳 一六歳 一七歳
◎下巻 なし		

表からわかるように、上巻では「幼き人」と呼ばれても、特に違和感はないが、中巻では十五歳から元服後の一七歳になっても作者は道綱を「幼き人」と書いている。

この道綱の幼さについて稲賀敬二氏は次のように述べている。

本当に道綱は「幼な」かったのか、それとも母の目にそう映っただけなのか。又もし道綱が本当に「幼な」扱いを受けても不思議がない有様だったのなら、その責任は道綱にあるのか、母にあるのか。母一人、子一人という環境は、母と子の絆のあり方にも、いろいろな特殊性を与えたであろうことは想像にかたくない。⁽⁶⁾

また、上、中巻を比べると中巻の方が明らかに道綱に関する記事が頻繁になっていることがわかる。ここから、作者と道綱の母子関係の変化について考えてみたい。

五

白井たつ子氏の「道綱・養女に関する記事の漸増⁽⁷⁾」によると、道綱に少しでも触れた記事を拾い出すと、上巻で九例、中巻で三二例であるという。上巻では、作者にとって、子どもよりも兼家との関わりこそが重要であった。道綱誕生の記事も「なほもあらぬことありて、春、夏悩み暮らして、八月つごもりに、とかうものしつ。」とあるだけで、彼女の母性などは日記の中で全く影が薄いものになっている。

しかし中巻になると、道綱は、作者と兼家との間の連絡員のような役割をするようになる。それに加え、日記では詳しく触れていないが、道綱は安和二年に童殿上し、翌年には従五位下になるなど、公的な場で、兼家と直接関わり合うようになる。中巻に至って、道綱は作者と兼家をつなぐものとして、その存在は大きくなったと考えられる。そのため、

上巻に比べて道綱を思う作者の記述は多い。例えば安和二年五月の病の時、『ただこの一人ある人、いかにせむ』とばかり、思ひ続けるにぞ涙せきあへぬ』など、ところどころに上巻では見られなかった母の愛情の直接表現が見られる。

また、中巻において、この母子関係を印象付ける記事は、天禄元年六月、道綱が作者の出家を止めようと自分の鷹を放つ場面である。この道綱の行動によって、作者は自分の思いを受け止め、態度に表してくれる息子をいとおしく思う。

上巻以来、蜻蛉日記の作者が直接夫兼家にぶつつけては、その都度夫からうまくはぐらかされ、自分の心の中にだけ鬱積させておかなければならなかった彼女の思いを、道綱は少年の純真さで正面から受け止めてくれる。口だけではない。「明日か明後日また来るよ」などと言って、機嫌をとつてもなかなか実行しない夫兼家に比べて、心に期した通りをすぐ実行によって示してくれる我が子道綱を見ると、母は、この子にだけは自分の思いが通い、この子だけは自分の事を本当に思っていてくれるのだと、深く感動する。

と稲賀氏が述べる通りである。⁽⁸⁾中巻において、作者の情愛は、夫婦関係のひずみや、正妻競争など、夫との間の情愛の希薄さの代償行為としてますます道綱へ集中していったといえる。

六

『蜻蛉日記』中巻は、作者にとって、作品の主題である「もののはかない身の上」を痛感した時期であっただろう。冒頭こそなごやかに始まるものの、時姫方との下衆同士によるトラブルや、東三条殿の一件、兼家の

素通り、近江の出現など、作者の妻としての基盤を崩すことばかりである。そのような中で、「父子の絆の輪と母子の絆の輪とが相重なる境界領域の中で、二つの輪の中心に位置する父と母との距離を、これ以上隔たつたものにならないように努力する青年に成長していった」道綱を、作者は「頼もし人」と呼ぶようになる。

ここに、夫の兼家よりも、息子の道綱の方を信頼している作者の心の変化に注目したい。

つまり、中巻でますます兼家との夫婦仲が険悪になり、扱いまでもが悪化していく中で、息子道綱の将来だけが唯一の希望だったのである。その作者にとって鳴滝籠りは、兼家の愛を求める女性の行為というよりも、子どもの将来を思う母としての行為といえるのではないだろうか。

七

鳴滝籠りで「妻」としての地位を示した作者の行為が、道綱の将来にどのように影響したのだろうか。鳴滝籠り後、『蜻蛉日記』の下巻になると、作者は近江に夢中の兼家に無断で広幡中川辺の父の別邸に移居し、夫婦関係はますます疎遠になる。そのような中で、道綱に対しては、いつも父親としての兼家の配慮が見られる。特に、天延二年の賀茂の臨時祭の記事では、兼家の権勢により道綱が急に舞人として召され、周囲からもてはやされているのを見て作者も満悦している。

また、花山院の退位に成功し兼家が政権を握るようになると、道綱も非参議となった。そのため寛和二年から翌永延元年七月にかけて、位が正五位下から一挙に従三位に昇進している。兼家の死後、道長に政権が移ったあとも、道長は異母兄である道綱を大納言でありながら東宮傳に任ずるなど扱いを遇している。本来東宮傳は大臣になるのが普通であ

る。この例外的な任官から、実際は表面的であるにせよ、道長は道綱を一家の家長として遇していたことが想像できる。

このように、将来において道綱が軽んじられることはなかったことを考えると、鳴滝籠りでの作者の目的——母として、子の将来を守る行為は達せられたといえるだろう。

注

- (1) 川村裕子『蜻蛉日記Ⅰ』角川ソフィア文庫（角川書店 平一五）これ以降本文はすべて『蜻蛉日記』角川ソフィア文庫に拠る。
- (2) 犬養廉『蜻蛉日記』新潮日本古典文学集成（新潮社 昭五七）
- (3) 上村悦子「愛の観念と現実」『国文学解釈の鑑賞第49』（至文堂 昭五三）
- (4) 後藤祥子「蜻蛉日記主題の形成」『王朝女流日記必携』（學燈社 昭六四）
- (5) 増田繁夫「作者の肖像」『王朝女流日記必携』（學燈社 昭六四）
- (6) 稲賀敬二「母と子の絆」『国文学解釈の鑑賞第49』（至文堂 昭五三）
- (7) 白井たつ子「蜻蛉日記の風刺」（風間書房 平八）
- (8) 稲賀敬二「母と子の絆」『国文学解釈の鑑賞』（至文堂 昭五三）

参考文献

- 上村悦子『蜻蛉日記解釈大成』（明治書院 昭六一）
秋山虔『王朝女流日記必携』（學燈社 昭六四）
池田つや子『王朝日記の新研究』（笠間書院 平七）
佐伯梅友『かげろふ日記総索引』（風間書房 昭三八）
西木忠一「道綱母の出家志向」『蜻蛉日記の研究』（和泉書院 平三）
守屋省吾「作者の生の軌跡」『国文学解釈の鑑賞第49』（至文堂 昭五三）
上村悦子「愛の観念と現実」『国文学解釈の鑑賞第49』（至文堂 昭五三）
今井源衛「男女の愛と憎しみ」『国文学解釈の鑑賞第49』（至文堂 昭五三）
伊藤博『蜻蛉日記研究序説』（笠間書院 昭五一）

増田繁夫『右大将道綱母』（新典社 昭五八）

菊田茂男「蜻蛉日記の世界」『平安日記Ⅰ』日本文学研究資料叢書（有精堂 昭五七）

藤本一恵「蜻蛉日記の一考察」『論叢王朝文学』（笠間書院 昭五三）

藤本一恵「かげろふ日記における主題意識の様相―天禄二年鳴滝参籠の記をめぐって―」『論叢王朝文学』（笠間書院 昭五三）